

デイドリームのカルズ船「龍馬I号」で、ミッドナイトダイブと題するスペシャルトリップが開催された。その内容はカルズタイトル通りのナイトダイブ三昧。しかし、ナイトと言ってもただのナイトダイビングではない。ナイトダイブよりも遥かに遅い真夜中、この時間から活動する生き物や魚たちに合わせて潜り、新たな生態を探る特別なダイビングだ。これまでに見たことの無い不思議な容姿の魚達と、あらゆる生き物のラーバ（幼生）との出会い。夜が来るのが待ち遠しいミッドナイトドリームの日々。

漆黒の海にライトが灯された瞬間、辺りは一変して幻想的な世界へと変わる

Photo&Text = Ryo Minemizu

Special Thanks = Day Dream Palau, Jiro Sakaue, Fisheye

Design=PanariDesign

パラオの熱い夜が始まる
ミッドナイト★ダイブクルーズ

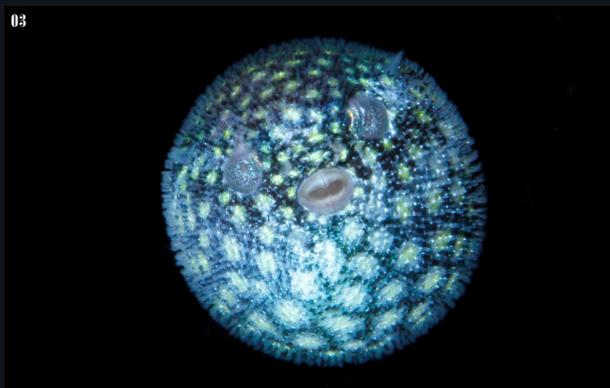
Palau, Midnight Dive Cruise

このクルーズの目的は、普段のダイビングではまず見ることのない不思議な容姿のラーバ（幼生）に出会う為だ。今流行っている浮遊系ダイビングだが、海洋島のパラオという地理的な特徴から、出現するのは主に熱帯の外洋に生息する生物層で、誰もまだ見た事の無いような生物が毎ダイブごとに出現するという、生物好きのダイバーには心をくすぐられる内容だ。こ



オンリーワンのダイビングを適える為の準備

ういう潜り方をしなければ絶対に逢えない生き物達との出会いは、ある意味オンリーワンのダイビングと言っても過言ではない。この企画は、パラオのミッドナイトダイブの先駆者でもある、魚類生態学研究家の坂上治郎氏（ジローさん）の提案により、デイドリーム（ジローさん）の提案により、デイドリムの秋野大氏が賛同して開催された。



01/ダイブ前にライトと三脚の準備をする坂上氏と秋野氏
02/真夜中の海に浮かぶ龍馬1号

エフィラクラゲの上にいるゼリーフィッシュライダー。ヒメセミエビ科のフィロゾーマと思われる



ウエルカムボードもミッドナイトダイブのスペシャルバージョン

03/体長1cmに満たない、極小のケショウフグ幼魚
04/まだ吻が突出している、イトウダイ科の仔魚

Palau, Midnight Dive Cruise

パラオの熱い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ

ミッドナイトダイブクルーズを行うには、様々な条件と、準備が必要になってくる。その一つが、数日・数時間にも及ぶナイトダイビングの間、常に一定の明るさを保つだけの多数の強力な水中ライトと、それを補う多数のバッテリーの準備、またライトを安定して設置する為には水中三脚も必要で、それらの準備には、毎日膨大な労力が費やされる。真っ暗な水中を照らすライトには、強力なHIDライトや、最近では高光束&高効率のLEDライト製品も開発されており、このような特別なダイビングにも十分対応できる様になってきた。



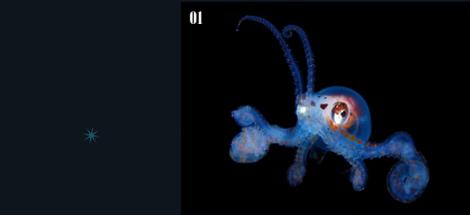
腹ビレが長いのが、テンジクダイ科仔魚の特徴



01/体が七色に光るテナガダコ科のラーバ。小さくてもしっかりと威嚇のポーズをとる
02/イエローカラーのタルマワシ。地球外生命体を連想するその姿にそえられる
03/防御の姿勢を見せる、ウツボ科のレプトケファルス期のラーバ

浮遊系が続々と現れるエキサイティングな夜

次に、このクルーズの要と言ってもおかしくないのが、開催する場所の選択とポイントまでのアクセス方法だ。真っ暗な夜の海を長時間移動するのはとてもリスクが高く、体力的な負担も大きい。しかし、龍馬I号の場合は、常に主要なポイントに近い場所に停泊する事が出来る為、ほんのわずかな距離をディンギーで移動するだけですみ、ダイビング後はすぐに龍馬で休み暖をとる事も出来る。まさに龍馬I号のアクセシビリティが無ければこのようなダイビングは叶わなかったことだろう。



04/この辺りは実際に調べた人でなければ判断が難しい。ジローさんによって判明したソメワケヤッコの仔魚
05/ハナギンチャク類の後期シェリヌーラ幼生
06/ワモンダコと思われるバララーバ。ダイビング後には一緒にくっついて上がってくる事もあった



場所が変わると、見られる生物層もガラリと異なった

Palau, Midnight Dive Cruise
パラオの熱い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ

真夜中からクルーズの本番



夕食を終えると、いよいよミッドナイトダイブクルーズの準備が始まる。充電をすべて済ませたライトがずらりとデッキ前に並び、ライトを固定する三脚セットの準備が着々と行われている。夜9時、デインギーにすべての機材を積み込んで、いよいよポイントへと向かう。ポイントまでは平均5分程度と近い。ポイントに着いたら、まずは手分けして水中へライトの設置を行う。浮遊系を集めるには3～10mくらいの水深がちょうど良く、ダイビング自体もその前後の水深で行われるので、平均水深はとても浅い。ただ、中層に浮かびながら探したり、撮影するので、中性浮力が完璧に取れることが参加の最低条件だ。

比較的多く出現する
テンジクダイ科のラー
バの中でも、この様
に美しい腹ビレを持つ
タイプは今回のクルー
ズで初出で大興奮

Palau, Midnight,
Dive Cruise

パラオの暑い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ



Information Link
<http://www.daydream-cruise.com>

関連情報HPへ

程よい間隔にライトが設置され、点灯が始まると、真っ暗な水中は映画“Abyss”の様な幻想的な風景へと変わる。しばらくすると、ライトの周りには無数のプランクトンが集まり始めた。まずは数mmほどのヨコエビやカイアシ類が無数にライトの周りを取り囲み、それを捕食しようとするシャコのアリマ幼生や細長い体と長いヒレが特徴のカクレウオのラーバな



形はすでにシャコになっている最終期のストマトポーターバ。目が赤くて印象的だ

親の姿からは想像もできないエキセントリックな姿

どがやってくる。さらに、ライトから少し離れた場所には頭部が張り出したチョウチョウウオ類のトリクチス幼生や、腹ヒレの大きく伸びたテンジクダイ科のラーバなどの姿もあり、徐々にボルテージが上がり始めた。



ラーバの面白さはなんとと言っても親の姿からは想像もできないエキセントリックな姿だ。特にこの時代のヒレには一定の期間しか見られない各々に独特な特徴があって、中にはどのような役割があるのか想像がつきにくいものもある。今回出会ったハナスズキ科のラーバは、他ではあまり例が無いような、体よりも極端に太くて大きいヒモムシの様な幅広のヒレを持っていた。これでは逆に海の中で目だててしまいそうだが、おそらくは、襲われたときに瞬時に切り離して、その間に自分が逃げるなどの役割があるのだろうと想像できる。



ミッドナイト終了後。互いの写真を見せ合い大いに盛り上がる。奥から坂上氏、秋野氏と、そして私



01/着底まじかのセレベスゴチの幼魚と思われる。我々に見つかる時、一目散に海底目指して潜降して行った
02/ジローさんの調べでは、アイゴ科の仔魚ということが判った

03/パラオのミッドナイトダイブ先駆者で、魚類生態学研究者の坂上治郎氏。乗船クルーズでは様々な情報を提供してくれる

04/潮が動いている証、刺されると痛いボウスニラも参上。栄養体の中間に生殖体異があるのが特徴

個人的にずっと探していたオトヒメエビ科の1種。ミッドナイトダイブでこんな簡単に出会えるとは……

Palau, Midnight Dive Cruise

パラオの熱い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ

※アリマ=Alimaは、現在では死語ですが、ダイバーの間では便宜的にアリマ幼生と呼んでいます。

背びれに独特の吹流しがあるハナスズキ科のラーバ。これにも皆で大興奮した

しかし、それが可能なもの、おそらく切り離してしまう一回きりだろう。襲った魚が嫌がりそうな何か分泌物を含んでいるのだろうか？ 海の中では人間が想像もしない様な魚達の生き抜く知恵が渦巻いていて、今はまだ想像の範囲に過ぎない。そういったことを探っていく楽しさも、このミッドナイトダイブでの出会いで得られる楽しみの一つだ。

また、今回は一頭しか出会わなかったが、腹ビレが大きい事か

らテンジクダイ科のラーバと思われる個体があった。閉じているときには一瞬気づかなかったが、滑空し始めた際に腹ビレを開くと、まるでホウボウのような美しい鱗膜を持っていて、目を奪われた。これらのラーバの生態は、まだまだ判っていない事が多いが、スペシャルアドバイザーの坂上氏が乗船していると、見た魚が何の仲間なのか、その場で判明する点もアドバンテージが大きい。また、浮遊系は魚に限らず、甲殻類やイカタコなどの頭足類・

刺胞動物などなど、あらゆるラーバが一挙に見られる。ハワイの著名な水中写真家でもあるクリストファー・ニューバートの写真集“Rainbow Ocean”で紹介された様な、クリスタルで鮮やかな生物が満載だ。パラオのミッドナイトダイブクルーズでは、何が出てもおかしくない状況は続き、潜る度にその期待は膨らんだ。



Palau, Midnight, Dive Cruise

パラオの暑い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ



Information Link
<http://www.daydream-cruise.com>

関連情報HPへ



ミッドナイトダイブクルーズの*日中の過ごし方



パラオの海には美しい景観がいっぱい。オニハタテダイのペアがイソバナに群れる

ミッドナイトダイブクルーズでは、夕食後の真夜中をメインに潜る。日によっては午後9時過ぎから2～3本潜るので、龍馬I号に戻ってくるのは、朝4時頃になることもある。龍馬に戻ってから片づけをし、シャワーなどを浴びると、眠りにつくのは朝方。お昼頃に起きて、遅い朝食を食べた後は、午後から通常のクルーズと同じようにダ

イビングをすることが出来る。もちろん、向かうポイントは通常のクルーズと変わらず、人気のポイントが目白押し。ブルーコーナーやピックドロップオフで魚影やナポレオンを楽しんだり、体力さえあれば魚類の産卵行動などを狙うサンセットダイブに行ったりして、ミッドナイトダイビング前に日中は2本のダイビングが用意されている。しかし、ミッドナイトダイブクルーズは昼夜真逆の生活になるので、体力的にはハードな日々であることも事実だ。しっかりと睡眠をとって、体を休めるために、人によっては日中のダイビングはキャンセルし、夜だけに集中するのも自由なので、その辺りは個人の体力と判断に合わせて決めるのも良いだろう。

01/ブルーコーナーで、ちょっと深場を見ればヤイトヤッコのオスがいた

02/日中の休憩時間、龍馬I号のトップデッキからパラオの島々を眺める

03/ブルーコーナーに人懐っこいナポレオンをゲストは激写中

04/クロヒラアジの群れが通り過ぎていく、ブルーコーナーにて

About DayTime

Palau, Midnight Dive Cruise

パラオの熱い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ

★ 龍馬I号について

デイドリームのカruise船龍馬I号。カタマランタイプ（双胴船）なので、共有スペースまでも広々としていて、全体にゆとりがある。共有スペースには、ダイニングや、畳のリビングルーム他、2階はサンデッキとなっていて、晴天時には海を見ながらの食事が可能。キャビンは清潔感溢れる現代的な作り。全室冷房完備で、全9部屋の



デイドリームのカruise船「龍馬I号」はカタマランタイプなので安定感抜群



★ 快適なクルーズ設備だからできるミッドナイト

うち3部屋はプライベート・トイレシャワールーム付。その他の部屋は、共有シャワートイレが別途用意されている。完備しているアメニティーは、バスタオル・ビーチタオル・フェイスタオル・ボディソープ・シャンプー・コンディショナーほか、ダイニングには24時間いつでも利用できるコーヒー & 紅茶も用意。電源は日本と同じ100V-Atype。支払いは、円やドルが可能で、カードはVisa, Master, JCBが利用できる。ダイビング時は、船の後方がダイブデッキとなっており、そこからデインギープートに乗って、ポイントまで向かう。



01/清潔感があってすっきりとしたデザインのキャビン。ベッド下はトランクなどの収納スペースとなっている

02/2階のデッキで海に囲まれながら開放感のある朝食タイム

連鎖個虫を産み出し、中の、シャミソサルバ単独個虫



03/独特の縞模様で判断が容易な、ハナグロチョウチョウウオのトリクチス幼生

04/環境が変わると出現する生き物も違って来る。砂地に現れたのはカクレウオ

★ Information

★ 次回のミッドナイトダイブクルーズ開催予定

★ 開催日=日本発着最短日程 2012年10月5日～11日（7日間）

★ パラオ現地乗船日程=2012年10月5日（夕刻から、順次パラオ到着後のご乗船）～10日（夕刻以降、ご出発便に合わせて下船）

★ 乗船ガイド=秋野大、スター、坂上治郎

★ 予定ダイビング本数=16ダイブ（天候・海況により変動する可能性あり）

※ 日中2ダイブ & 夜～深夜ミッドナイト2ダイブを4日間開催（下船日の早朝ダイブは無し）

② ミッドナイトダイブクルーズのお問い合わせは……

デイドリームクルーズ
✉ info@daydream-cruise.com

Palau, Midnight Dive Cruise

パラオの熱い夜が始まる ミッドナイト★ダイブクルーズ